

2020.11.25 yahoo ニュース掲載

# DIAMOND online

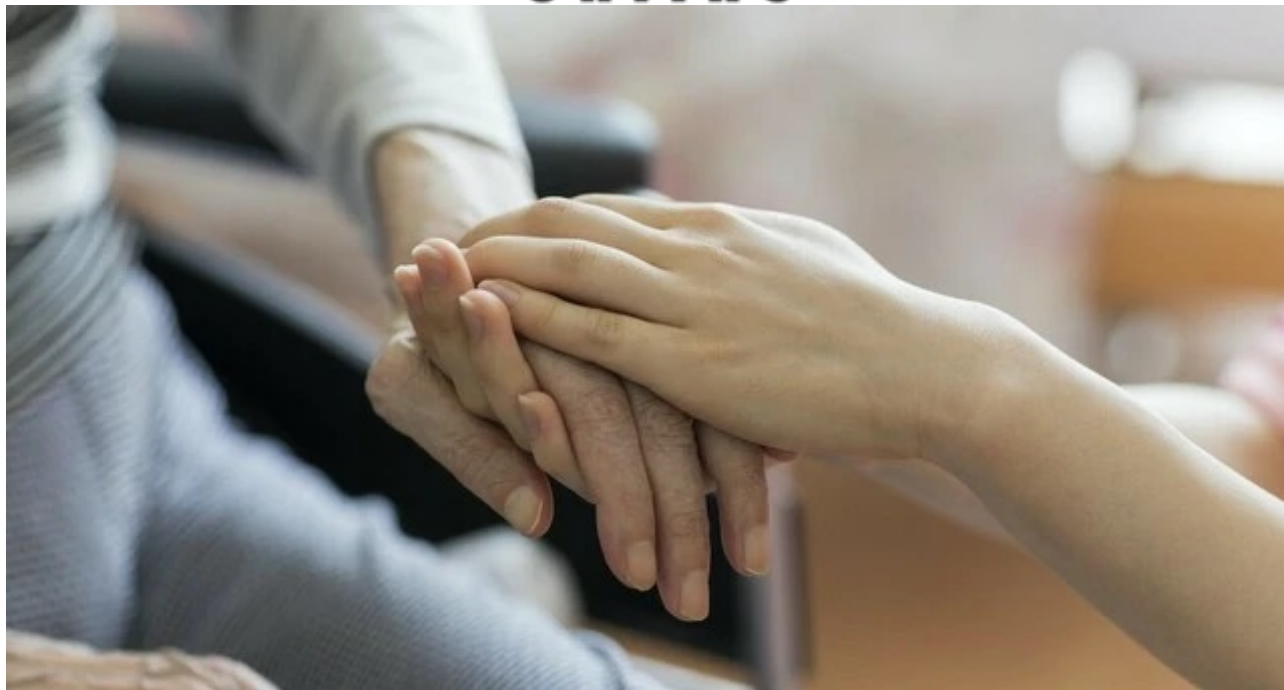


Photo:PIXTA

## ● 高齢者と障害者の共生型ケアと 農業を両立する「半農半介護」とは？

岩手県八幡平市。盛岡市から車で北に約 40 分。岩手山を南に仰ぐ農村地帯である。刈り終えたばかりの稲田が続き、道路沿いに民家が立つ。そのひとつ、築 50 年の 2 階建ての玄関先。「デイサービス&宿泊 里・つむぎ」の大きな手作り看板が目を引く。

### [【この記事の画像を見る】](#)

運営する NPO 法人「里・つむぎ八幡平」が、この民家で高齢者と障害者の共生型ケアを始め、同時に、農業も営む「半農半介護」を旗揚げした。15 年前に 3 町村の合併で誕生した八幡平市は、住民が 2 割も減って今は約 2 万 5000 人。高齢化率も全国平均より 10 ポイント高い 39%。典型的な「田舎」だが、日本の将来モデルとされる「地域共生社会」の胎動が感じられる。

## ● 「暮らし第一」の考え方で 複数のサービスを一括提供

「里・つむぎ」のドアを開けると、コの字型のソファで高齢者と障害者たちがくつろいでいる。廊下の先の各人の部屋の住人と地域の人が合わせて 10 人ほど。その中の 2 人は、同じ敷地内の「障害者グループホーム・白山の里」から来た。

高齢者たちは介護保険の「認知症デイサービス」の利用者である。障害者は障害者総合支援法の「障害者等日中一時支援事業」の利用者だ。台所や食卓、それにソファが並ぶ居

間。障子を外して見通しが良く広い。昔ながらの和室が並ぶ各部屋は老人福祉法の「住宅型有料老人ホーム」である。

制度上区分されている複数のサービスがひとつの屋根の下で重なり、一体的に提供されている。利用者たちは、慣れ親しんだ自宅にいるようなゆったりとした表情だ。「暮らし第一」の考え方で生まれ、運営者は「まるごとケア」と呼ぶ。個別の運営基準に縛られがちな社会福祉法人や大手事業者には思いつかない斬新な発想だ。

## ● 民家を再利用し 普通の暮らしを提供

「里・つむぎ」が使用している家屋はかつて、法人の理事長、高橋和人さん（59歳）が祖父母らと3世代で生活していた家と聞いて納得する。生活感が漂うのも当たり前。中のひと部屋の前で「ここは私の子ども部屋でした」と高橋さん。

すぐ隣でも、ひとつの建物で2つのサービスが共存している。その名も「共生型グループホーム・白山の里」。1階は9人の「認知症グループホーム」で、2階は5人が入居する「障害者グループホーム」だ。

一時支援事業に行かない障害者3人は日中、別の事業者のパン工場やコーヒーの仕分け作業に通っている。就労継続支援B型の対象である。朝晩や週末は1階に下りてきて、高齢者たちと一緒に食事を取り、皿洗いやテレビを見て過ごす。

その中の一人、Aさんはダウン症の女性。今年の成人式の日撮影された振袖様の浴衣姿の写真が1階の居間兼食堂に掲示されている。高齢者たちのひ孫世代だ。

入居者の50歳代のBさんは統合失調症で精神科病院から退院してきた。病院では、車いすを手放せず、よだれも出ていた。4年前にここに転居。しばらくは、職員が音を上げてしまう振る舞いもあったが、次第に信頼関係が築かれ、隣の「里・つむぎ」に通いだしたことで「徐々に変わった」と高橋さん。

今は、毎日のように歩き、高齢者たちと和気あいあいの日々を送っているという。病院とは全く違う、普通の民家での普通の暮らしで気持ちがよみがえったようだ。筆者が訪ねた日には、食卓で職員とオセロゲームに熱中していた。

## ● 小規模多機能型居宅介護で「通い」「泊まり」「訪問」それぞれに対応

「里・つむぎ」の向かいには、介護保険の小規模多機能型居宅介護（以下、小多機）を営む「くるまっこ」が立つ。「通い」「泊まり」「訪問」の3つのサービスを利用者ごとに違う組み合わせで提供でき、在宅サービスの本命といわれる。天井の高い開放的なダイニングでは、「通い」の地元住民が過ごす。

「泊まり」の7室の中には、長く住み着いているがん終末期の老人の姿もあった。「くるまっこ」とは水車に由来する高橋家の家号で、かつて高橋さんの敷地内に水車があった。

毎日のように通って来る利用者の中には、少し離れた住宅型有料老人ホームの入居者が3人いる。JR花輪線大更駅に近い津軽街道沿いだ。この建物「ぱんたれい」がまた「普通」ではない。

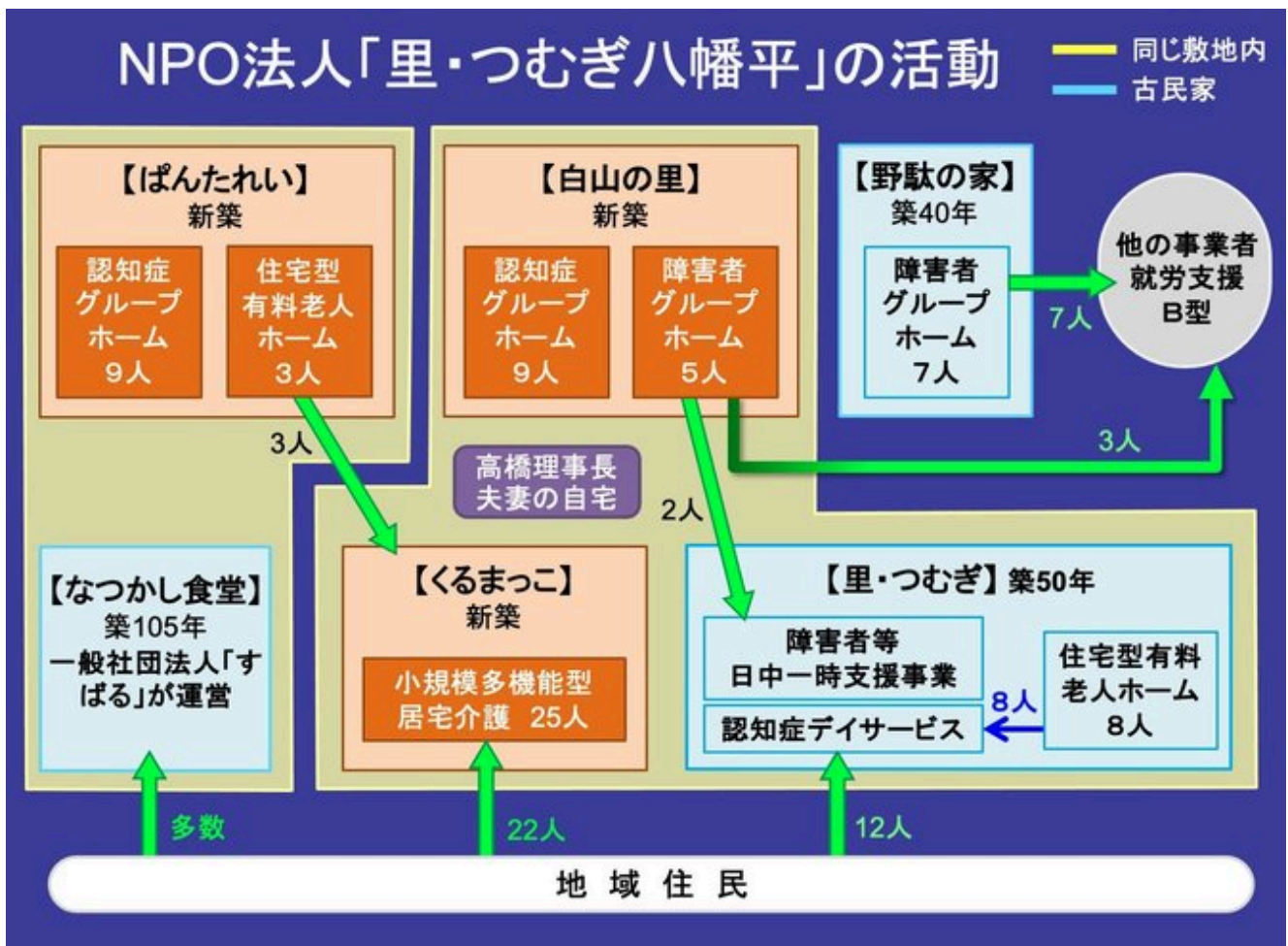
9室の認知症グループホームと3室の住宅型有料老人ホームがひとつの建物内に並ぶ。部屋の中は同じ造りだ。認知症グループホームは普通、単独の集合住宅として運営される。それが別の居住系サービスと隣り合っている。本人に必要なケアに合わせた制度の独自活用といえるだろう。

「ぱんたれい」とは「万物は流転する」というギリシャ語。命名した高橋さんは「人間は自然の一部、その一生は自然の流れの中にあるという思いを込めた。看取りケアに通じる」と話す。

● 古民家を改装し食堂も開設 3地域6つの建物で9サービスを提供

「ぱんたれい」と同じ敷地内に立つ築105年の古民家は「なつかし食堂」。和菓子店を改装し、昨年4月から地域住民にランチを提供している。高齢者向けのメニューは特別にワンコインだ。吹き抜けの広間には、太いしめ縄の立派な神棚が利用者を見守る。大正初期の歴史を感じさせる。

店の割に広い厨房では毎日多くの食事を作る。「里・つむぎ」など各施設の利用者の食事をすべて賄うため配食する。「介護現場で調理の手間と時間が少なくなれば、その分、ゆとりを持って利用者に寄り添えますから」と高橋さん。



もうひとつ、北に向かうと8人が生活する障害者のグループホーム「野駄の家」がある。築40年の友人の家が壊されると聞いた高橋さんが、「もったいない」と、集合住宅に改修した。床を全面的に張り替え、トイレや台所、洗濯機置き場などを増やした。40歳代から76歳までの、3人の知的障害者と5人の精神障害者が暮らす。

こうして同NPOは、3地域6つの建物で9つのサービスを手掛ける。全利用者は約80人、うち小多機の長期宿泊者を含めた入居者は約45人。各サービスの利用者はしばしば相互に行き交う。どこも「普通の暮らし」だから、制度や基準の違いを超越しているようだ。

● 利用者は15人まで 利益よりも「暮らし第一」

建物は古民家も新築もすべて利用者は15人までにとどめた。利用者から得られる収入は法基準で定まっているから、多くの事業者は規模を大きくしたがる。だが、ここでは「大規模施設は生活になじまない」と断固拒絶している。

「生活の継続性」が第一といわれる認知症の人にとっては、何よりの環境だろう。「自己決定」と「残存能力の活用」とともに、「生活の継続性」は1982年にデンマークで唱えられ、世界に広まった高齢者福祉の3原則のひとつである。

とはいえ、これまで試行錯誤の連続だった。「ぱんたれい」は2015年11月に12室の住宅型有料老人ホームとして開設した。介護付き有料老人ホームと違い、訪問介護のヘルパーがケアプランで決められたサービスを、決まった時間に提供していた。バラバラな時間に小刻みに入る。そのため、皆で一緒の外出がままならないなど、煩わしさが募り、2年半後に9室をグループホームに転換し、3室の人は「くるまっこ」の小多機に通ってもらうことにした。

その「くるまっこ」は、当初、展望台付きレストランの併設を計画していたが、建築法規をクリアできなくなりあきらめた。

「なつかし食堂」は、一昨年春まで「古民家デイ・なつかしの家」として、定員15人の通所介護（デイサービス）事業所だった。だが、「伝統を伝える地域遺産を住民に開放しては？」となり、誰でも利用できる食堂に変えた。

その2階、透かし彫りの欄間がある和室で障害者向けの就労継続支援B型事業を始めようとしたが、他事業所との調整が進まず、まだ開店休業状態だ。

壁にぶつかり、乗り越えながらの歩みであった。事業を始めて今年でまだ10年目。短期間に最先端のケアを手掛けてきた。なぜできたのか。

● 「普通の暮らし」へのこだわり 原点は実母の最期

高橋さんは何代も続いた農家の生まれ。東京の大学を1年で中退後、盛岡市でアンティークを含めたインテリア店を開業した。「当時は農業が嫌で、シティーボーイにあこがれていましたから」と振り返る。

15年続けたが、41歳の時に店を閉じた。その後、ホテル勤務などさまざまな職を転々。知人から声を掛けられ、45歳で社会福祉法人の立ち上げに関わる。そのまま、法

人が開設した定員 60 人の特別養護老人ホームの事務長となり、施設長も体験、高齢者介護の現場に初めて入る。豊富な人生経験が、福祉職の陥りがちな「専門性のわな」と距離を保ち、「普通の暮らし」へのこだわりを育んだようだ。

まず、大規模施設での集団管理方式に疑問を抱く。「本来、介護は小さな生活の延長上にあるはず」と不信感が高まっていく。その頃、実母に認知症が判明。母と 2 人暮らしだったため、自身での介護、看取りを決意。離職して独立し、2011 年 4 月に実家を改装、宅老所「里・つむぎ」に衣替えし介護事業に乗り出す。

そうしてできたのが、デイサービスと宿泊を兼ねた複合施設が宅老所である。介護保険前から各地で広まっていた日本独特のケア方式だ。宅老所の「宅」は自宅の「宅」、そこで老人をみる。大規模施設とは対極を成す。この家がその後の活動の原点となる。

母親も「里・つむぎ」に移り、夜は高橋さんが隣に布団を敷いて横になった。最期は穏やか。職員や親戚が語り掛け泣き笑いの中で見送った。

現在の高橋さん夫妻の自宅は「里・つむぎ」や「白山の里」「くるまっこ」に囲まれている。「24 時間いつでも呼ばれればすぐに出られるようになってしまった」と苦笑する。深夜の看取りに立ち会い、手を握り肩をさすることも。妻の寿美恵さんは、法人の事務局長でもある。

古民家と並ぶ地域資源、農業を「命の循環の場」と位置づけ力を入れる。2 町歩の稲田を抱え、畑ではナスやネギ、ズッキーニ、ジャガイモ、アスパラなど多様な作物を栽培。出荷しながら高齢者たちの食卓も潤す。3 年前から無農薬で始めた地元産のニンニク「八幡平バイオレット」の販路開拓に忙しい。

農業は一般社団法人「すばる」で手掛けているが、ケアの利用者たちも野菜の収穫時には参加し、草取りなどで関わる。「生命のあり方を農業で考えたい。自然の中に人も含めた生死があるはずです」と高橋さん。

「農福連携」を視野に障害者就労継続支援 B 型事業所を設け、農作業に取り組んだこともある。だが、冬場の作業がないことや利用者が少なく、1 年余りで撤退し苦い経験となった。

とはいえ、専業農家だったというこという心強い協力者がいる。地域住民にとって農業は「普通のケア」を支える生活のベースでもある。生活の中に看取りもあると考え、多くの利用者を看取ってきた。「安心して死ねる場所でありたい」と強調する。「半農半介護という姿勢です」とヤギをなでながら語る。

(福祉ジャーナリスト 浅川澄一)